

(PDF 版・6の2のイ)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十一節 教会における自由—— 言葉の自由」

(文責・豊田忠義)

「二十一節 教会における自由—— 言葉の自由」 (420-461 頁)

「一 言葉の自由」

(3) イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「一般的出来事として必然的に起こるのでは決してない、また必然的な一般的出来事としては決して起こらない」、あくまでもイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での神のその都度の自由な恵みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示の出来事」(客観的な「存在的必然性」)とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」(主観的な「認識的必然性」)に基づいて——この「**選**びに基づいて起こる」「**主**体としての聖書の力、聖書の神性の力が働く特別な場所と領域」は、この世のただ中にあるところの、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、聖霊の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準として、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す第三の形態の神の言葉である「**教会である**」、換言すれば「**直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性**」——すなわち「**まことの権威**」と、「**直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性**」——すなわち「**まことの自由**」とによって賦与され装備された「**権威と自由を持つ**」ところの「**聖書の権威と自由を剥奪したり**」、「**聖書の権威と自由を相対化したり**」しないところの「**教会である**」、また**教会を「啓示と等置したり同一視したり**」しないところの「**教会である**」。したがって、その教会は、その「自由な聖書の力そのものによって選ばれ、指示され、要求され、征服され」、「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書によって宣教を義務づけられたところの、この世のただ中における「**特別な場所であり領域である**」。ここに、「**聖書の神性の特徴がある**」。この「**教会と非教会という区別は二重の意味で暫時的である**」。第一に、起源的な第一の形態の「神の言葉」(具体的には、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書)は、第三の形態の神の言葉である教会を、「神の言葉の三

形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続させるという仕方で「神のために、また(神に奉仕しつつ)世のために」、「その力が働く……特別な領域として選び、特徴づけ、要求し、征服する」という意味で、その区別は暫時的である。第二に、「絶対的な限界づけをもってでもなく、固定した限界づけをもってでもなく、可動的な限界づけをもって」、すなわちそれぞれの時代において、その時代と現実**に強いられて**、この世のただ中を生きる第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会として、「教会は非教会から分けられている」という意味で、その区別は暫時的である。キリストにあつての神は、「さしあたって先ず〔第三の形態の神の言葉である〕教会に向かつて、教会の中で、〔教会自身に〕語り給うことを通して、世に向かつて語るのである」。「それであるから以前教会があったところで、今は教会がないということがありうる」。それと同時に、「以前教会がなかったところで、今、教会があるということがありうる」。全世界としての「教会と非教会〔世〕の区別、向かい合い」は、「他の諸民族に対するイスラエルの関係が取り除かれえないものであるのと同じように、決して取り除かれえないものである。この二つの民の区別、向かい合いの中で、神は、……先ず第一に〔第三の形態の神の言葉である〕教会を造り出すという仕方で世と語り給う」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会は、限界づけられたその人間的な現実存在全体の相対性を、繰り返し意識することができるし、意識すべきである**」。したがって、ただ神の側の真実としてのみある、それ故に「成就と執行、永遠的実在として」ある「神の国からだけ要求することができること」を、「限界づけられた人間的な現実存在全体の相対性に生きる〔第三の形態の神の言葉である〕教会から要求することはできない」。第三の形態の神の言葉である「**教会**」は、「その限界づけとその特殊存在において、自分自身に奉仕するために……召されたのではなく」、キリストにあつての「**神と神の国とその成就を待ち望むその宣教における神への奉仕を通して世に奉仕するために召されていることを**〔すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいたあの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、教会自身とこの世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えを〕、常に新たに意識することができるし、意識すべきである」。何故ならば、第三の形態の神の言葉である「**教会**」は、起源的な第一の形態の「**神の自由な言葉……を通して選ばれ、特徴づけられ、要求され、征服され、限界づけられている**」からである、「**聖書によって宣教を義務づけられている教会**」は、「**神の言葉に仕えることができるだけである**」からである。キリストにあつての「**神の国はまことの神の国である**。それであるから、神の国の建設は人間の力と自由処理に委ねられてはいない」。したがって、「神の国」は、人類史の尖端性としてある西欧近代における経済社

会構成を資本主義に置いた自由主義国家の延長線上にあるものではない、あるいはマルクス主義国家の延長線上にあるものではない、あるいは観念の共同性を本質とする国家の無化を伴う社会的な現実的な個体的自己としての全人間の究極的総体的永続的な解放という人間の全体的解放、すなわち革命の究極像としてあるものでもない。したがってまた、自由の精神を原理とする西欧近代を頂点とするヘーゲルの歴史哲学と「律法・父の国・奴隷の状態」→「恩寵・子の国・神の子供の状態」→「自由・霊の国・神の友の状態」という救済史的神学とを混合させたモルトマンの神学的な三段階的進歩史観の果てにあるものでもない。人間的な「最も熱烈な伝道の意欲も、世の困窮と憧憬に対する最も深い開放性も、信仰と不信仰、服従と不服従の間の境界……に関して何も変えることはできない」。ここで、「信仰と不信仰、服従と不服従の間の境界」は、イエス・キリストにおける「福音に仕える奉仕と福音を軽んじる蔑視の間の、まことの建設と転倒した建設の間の、福音の使信を喜んで聞くことと心を頑なにしておかないこととの間の区別を通して特徴づけられている」。その前者においては、次のような思惟と語りと行動となる——「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的な諸原理や理念や体制の内に求めようとしないで、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを、いっさいのものにまさって恐れ、かつ、愛すること、神を、大きな問題においても、小さな問題においても、彼がかつてあり、いまあり、やがてあり給う權威のままに肯定し、是認すること、私たちの個人的、社会的生活を敢えて律して、すべての善きものを神から、神からすべての善きものを期待するべきである」（『共産主義世界における福音の宣教 ハーメルとバルト』）。また、その「世の困窮と憧憬に対する最も深い開放性」は、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』における明治期のアイヌ人の内在の精神（人類史の原型・母型・母胎としての縄文的段階における内在の精神を温存させていたところのそれ）以下のものではあってもそれ以上のもではないし、野村達郎の『民族で読むアメリカ』における北米インディアンの内在の精神（人類史の原型・母型・母胎としての北米インディアンの段階における内在の精神を温存させていたところのそれ）以下のものではあってもそれ以上のもではない、と思う。また、それは、近代日本を生き、一方で、現実的な社会の中で具体的な身近な岩手農民のために身も心も尽くして奉仕し続け、他方で、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（『農業芸術概論綱要』の言葉）、「全体が幸せにならなければほんとうの幸せとはならない」（『よだかの星』の主題）ということを経験し自覚し、『雨ニモマケズ』で自己の人間の限界を経験し自覚した宮沢賢治のその存在、その思考、その実践以下のものではあってもそれ以上のもではない、と思う。バルトは、『証人としてのキリスト者』で、最終的に離脱した宗教的社会主義における「そこでの人間の困窮と人間に対する助けとが、聖書が理解しているほどには、真剣に理解されておらず、深く理解されていなかった」、と述べている。第三の形態の神の言葉である教会が、「もしも……、〔聖書を

媒介・反復するという仕方です。福音に仕え、自ら福音の使信を喜んで聞き、純粋に宣べ伝えようと努めることによって、〔全世界としての〕教会を世と関連づけ、世に奉仕するのではなく、それと違った仕方です。教会を世と関連づけようとするならば、……そのことは、わがまま勝手さ以外の何ものでもない。その時、その「教会」は、起源的な第一の形態の「神の言葉の自由〔具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書の自由〕を、ひそかにかにあるいはおおびらに否定することとなる」。起源的な第一の形態の「神の言葉の自由」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書の自由）は、「人間によって選ばれるべき一般的な可能性におけるそれではないし、また教会によって選ばれるべき一つの可能性ではない」。それは、常に、人間的な教会的な選択可能性の彼岸・外にある。

起源的な第一の形態の「神の言葉の自由」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書の自由）は、「自ら教会を基礎づける自由である」——すなわち、それは、「すべての時代と地域に属する人間たち、あらゆる性質、運命、生活態度の人間たち、あらゆる種類の自然的——精神的傾向を持つ人間たち、……すべての中で、あらゆる種類の罪性と死に陥った姿を持つ人間たち」において、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて起源的な第一の形態の「神の言葉〔具体的には、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書における神の言葉、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教〕が、彼らのもとで聞かれるようになり、服従の傾聴を造り出す」という仕方です。「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）において、「自分自身と一つに結びつけまたお互い同志結びつける自由である」。この「服従の傾聴こそが、キリスト教信仰であり、このキリスト教信仰の場所と領域が、神の言葉が自分の力を行使する場所と領域である」。その場所と領域の共同体・共同性が、「神の言葉三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復するという仕方です（聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とするという仕方です）、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すところの第三の形態の神の言葉である「まことの教会」である。「啓示の真理によれば、われわれは、われわれをキリスト教信仰へと呼び出す神の言葉の自由以外の自由を知らない」。それ自身の出来事の自己運動を持つ起源的な第一の形態の「神の言葉が、事実……、自ら服従の聴従を造り出す自由、ただこの自由だけを自分のものとして取り上げたということは、……神の言葉の内容に属していることである」。その「啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持つイエス・キリストにおける神の自己啓示からしてそうである。その第三の形態の神の言葉である「教会を基礎づける神の言葉がなす活動」は、「二重の意味で自由である」。第一に、

起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、「服従の聴従を、キリスト教信仰そのものを不可能にしてしまう……人間の罪深さと死に陥った状態に対して、自由である」。すなわち、「それは、力強い」。第二に、その「神の言葉」は、「人間の自然的な罪と死を通して交わり〔「信仰の中で神と、……お互い同志がひとつとなること〕が寸断されたばらばらな姿に対して、自由である」。すなわち、「それは、力強い」。このようにして、その「神の言葉」は、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、「われわれに信仰の可能性を与えるべく自由であり、また実際、教会を基礎づけることの中で……この自由を実証する」。その証左は、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり、啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の現存である。

人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、生来的な自然的なわれわれ「人間が、〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している〕預言者と使徒たちを信じるということは、また「預言者と使徒たちを信じるであろうということ」も、「自明的ではない」。何故ならば、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、生来的な自然的なわれわれ人間は、「肉であって、それゆえ神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持ってはいない」からである、われわれ人間の生来的な自然的な「『自分の理性や力〔知力、感性力、悟性力、意志力、想像力、自然を内面の原理とした禪的修行等〕によっては』——全く信じることができない」からである。したがって、まさに常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意ができていくところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（あくまでも神の側の真実としてある、神の側からする神の人間との架橋）であり、神との間の「平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かっての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かっての人間の用意が存在する」。「聖書的啓示証言が要求するところの〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた〕信仰の实在と単一性、信仰へと照らし出す力および信仰の中で集めまとめる力、それこそ神の言葉の自由の第一の秘義である」。したがって、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書的啓示は、〔第三の形

態の神の言葉である全く人間的な] 教会の自由処理に任せられた『委託物』ではない」。それは、第三の形態の神の言葉である教会およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者である。したがって、第二の形態の神の言葉である「聖書的啓示を〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 教会の自由処理の対象として扱う間違っただけの考え方をする時」には、「聖書的証言」と制度としての組織、その頂点にいる教皇、それに連なる教職が支配し管理する「教会の伝承と等価し、同一視するローマ・カトリック的な誤謬が発生する」。言い換えれば、その時には、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命され「抜擢され、装備と全権を与えられて、『人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」までは]、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる』（マタイ一六・二八）と言われている者たち〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において客観的に存在している聖書的啓示証言者たち〕のはじめのところに立っているその抜擢〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその抜擢]、装備、全権の力全体が看過されている」、また『これらの事が、ことごとく起こるまでは、この時代は滅びることがない、天地は滅びるであろう、しかしわたしの言葉〔啓示ないし和解の实在』そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉〕は滅びることはない』（マタイ二四・三四以下）と言われている者たちのはじめのところに立っているその抜擢、装備、全権の力全体が看過されている」。第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「聖書的証言」は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の『委託物』にはならず、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動において「出来事として起こり続けて行くのであり、この出来事の中で、この出来事と共に、神の言葉はその自由を実証する」。

起源的な第一の形態の「神の言葉」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書）は、第三の形態の神の言葉である「教会の基礎づけにおいて働くだけでなく、またあらゆる瞬間において教会を維持する際に力を発揮する」。第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「聖書の自由」は、「ただ聖書を通してだけ、〔第三の形態の神の言葉である] 教会は現にあるところのものであり、聖書なしの教会は直ちに無の中に消え失せ、……死滅してしまわなければならないということ……の中で、神的な自由として、〔啓示者、言葉の語り手としての] 創造主の主権として、示される」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会は、そもそも造られた世界が神の継続的ナ創造によってささえられているのと同じように、〔起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動における] 神の継続的ナ創造を通して生きる」。前者の「神の継続的ナ創造」については、次のように言うことが

できる——「創造された世界における神の愛とわれわれの世界におけるイエス・キリストの事実の中における神の愛との間には差異がある」。すなわち、後者の神の愛は、「まさしく神に対し罪を犯し、負い目を負うことになった人間の失われた世界に対する神の愛である」。「イエス・キリストにおける和解ないし啓示」は、「創造の継続や創造の完成ではない」。この意味は、「和解ないし啓示」は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方であるイエス・キリスト自身、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事としての「新しい神の業である」。それは、「神的な愛の力、和解の力である」。イエス・キリストは、和解主として、創造主のあとに続いて、その第二の存在の仕方において「第二の神的行為を遂行したのである」、その存在の仕方の差異性における「創造と和解のこの順序に、キリスト論的に、父〔啓示者、言葉の語り手〕と子〔啓示、語り手の言葉〕の順序が対応しており、和解主としてのイエス・キリストは、創造主としての父に先行することはできない」。しかし、父と子は共に「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質としているから、この従属的な関係は、その内在本質の差異性を意味してはいないのである、存在の仕方における差異性を意味しているのである。「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の根源・起源としての「父は子として自分を自分から区別するし自己啓示する神として自分自身が根源〔・起源〕である。したがって、その区別された子は父が根源〔・起源〕であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は父と子が根源〔・起源〕である。この神は、子の中で創造主として、われわれの父として自己啓示する」。また、この神は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質としているから、「父だけが創造主なのではなく、子と霊も創造主であり、父も創造主であるばかりでなく、子に関わる和解主であり、聖霊に関わる救済主でもある」。

第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している聖書における「預言者と使徒たちの信仰から〔第三の形態の神の言葉である〕教会の信仰へと継続的に証しされる中での再生と新しい創造という恵みの言葉の働きが理解されなければならない」。したがって、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、そのような「**神の言葉の継続的な証しを最も必要なこととして祈り求めない教会**」は、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書における「**神の言葉なしに生きる**」こと**目指す教会**は、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準としない教会は、それ故に「**自然的な生命力**」に、人間の生来的な自然的な「**理性や力**」に依

拠しそれを鼓舞する、「人間的な宗教、世界観、組織、それらに基づいている人間的な制度と共同体、人間的な形成物、正道を踏み外した墮落したキリスト教に生きようとする教会」は、「既に死滅しているのである」、そこでの言葉は、既に自然時空に死語化しているのである。何故ならば、第三の形態の神の言葉である「教会」は、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書を根拠としてだけ立っているし、その……根拠の上に立って進んで行くことができるだけである」からである。したがって、このことが、「常に……すべての教会的な活動、教会を建て守ろうとするすべての行動、すべての護教論的、教会政治的な施策の標準である」。教会が、「教義学的な合理主義を明確に否定して」、キリストにあつての啓示、啓示の真理、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、啓示神学の立場に立脚して、終末論の限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書の真理の言葉に信頼を寄せて身を任せるならば、……教会は、被造物に対して与えられる神の普遍的な恵みと忍耐が、……また教会にとっても助けになるであろうことを信じるのがゆるされる」。

第三の形態の神の言葉である「教会が、〔それ自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕神の言葉を通して……維持されるということ」は、具体的には、起源的な第一の形態の「神の言葉」が、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書の啓示証言によって、それ自身の自由を実証すること……の中で遂行されるということである」。すなわち、そのことは、起源的な第一の形態の「神の言葉が、イエス・キリストの甦りの中で、自分自身を世に向かって主張して行く力を持っており、世の汚れにそまらずに自らを保つ力を持っており、……また世を自分のものとする力を持っており、最後に自分自身を新しく表現し、与えて行く力を持っていることによって遂行されるということである」。この「神の言葉自身の内的な生命が教会の生命を造り出すのである」。したがって、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である教会は、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における起源的な第一の形態の神の「言葉自身の……内的な生命〔起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動〕の舞台であることによって」、また「その生命の運動に参加することによって」、また「その自己運動に対して『然り』を言うことによって」、「換言すれば、自分自身の救いを……ただこれらの運動が生起することの中にだけ、尋ね求め、自分の礼拝と交わりの生活、説教と信仰告白がこれらの運動の後に続いて出来事となって起こる限り、それらの運動に従うこと

によって、「生きるのである」。このような訳で、第三の形態の神の言葉である「教会の維持」には、「教会の右を見ても左を見ても、はちきれんような健康さと内容充実さにおいて、ただ信仰のみという値よりももっと安価な値で手に入れることができる人間的な形成物……が存在している」から、「教会が〔それ自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕神の言葉自身の動きに伴って動いていかなければならない<非>利己的な注意深さ〔「わがまま勝手」さと恣意性独断性の否定〕が肝要なことである〔換言すれば、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とする他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性が肝要なことである〕」。第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした「真理の教会にとっただけは、全世界〔教会自身と世〕にとっただけは、全世界〔教会自身と世〕にとって生命であるまさにそのことが、死の深淵である」。何故ならば、全く人間的な教会自身とこの世としての「全世界そのもの」は、イエス・キリストにおける啓示の時間によって、「否定された時間」・世、『失われた』時間」・世、「否定的判決の時間」・世、「非本来的な時間」・世だからである。「まことの過去」・世と「まことの未来」・世を包括した「まことの現在」・世は、「実在の成就された時間」・世としての「イエス・キリストがご自分をお示しになった復活のあの四〇日（使徒行伝一・三）」、「キリスト復活四〇日の福音」である。したがって、第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「教会は、全世界〔教会自身と世〕にとっただけは、全世界〔教会自身と世〕にとって生命と見えるところに死を認識し」、「啓示の真理にとっては死である全世界〔教会自身と世〕の中に、キリストの復活による生命を選び取らなければならない」。まさに、それが人間論的な自然の人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「人間の人間的存在がわれわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」（『福音と律法』）。第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「まことの教会として、教会が現にあるところのものであるということ」は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいた「み言葉が、教会のただ中であって、それ自身の力ゆえに生き続けるということである」。したがって、第三の形態の神の言葉である「教会は、ただ〔起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を〕願い求めることができるだけであり、

……ただそのことに感謝することができるだけである」。

起源的な第一の形態の「神の言葉の自由が実証されることを通して教会が維持されるということ」は、「具体的には、〔第三の形態の神の言葉である〕教会が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書を通して絶えず要求されることであり、聖書を通して教会に与えられ、教会が聖書から受け取らなければならない絶えざる証言の歴史であるということである〔第三の形態の神の言葉である教会が、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書から受け取らなければならないところの、断続性と連続性との構造としてある段階を持った「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における聖書を媒介・反復することを通じた「絶えざる証言の歴史であるということである」]」。したがって、そうでない時には、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書」は、「世の一般的書物あるいは教会自身の自称『委託物』」であるキリスト教的、福音的な理念、世界観、道徳等と同一のものになってしまう」。したがってまた、その時には、起源的な第一の形態の「神の言葉には、……教会を維持して行く力はないのである」、「時代と状況の変遷……の中で避けることができない幻滅や失望のただ中で、教会を維持して行く力はないのである」。起源的な第一の形態の「神の言葉が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書であることによって、神の言葉は、具体的な「〔放任されて〕はいない第三の形態の神の言葉である全く人間的な」教会の指導、支配、教育……を実行にうつすのである」。したがって、第三の形態の神の言葉である「**教会の維持は、人間的に見た場合、〔それぞれの時代において、その時代と現実に強いられて、第三の形態の神の言葉である〕教会の中で、〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くという仕方**で、〕聖書が読まれ、理解され、注釈され、適用されるということ、**教会の道程全体が**……〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している〕**具体的な証言を聞こうと努める努力の道程である**ということが繰り返し倦むことなく出来事となって起こるということに依拠している」。それに対して、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準としない、「**死の深淵に向かつての歩みを意味するところの脇道に逸れる、利己的で注意深さを欠いた致命的な欠如の中にある教会の維持の仕方においては、自分の正体を暴露しないために、「普通は、教会が既に語ったことに対する大変な忠実さ、教会自身が語らなければならないと考えていることに対する大変な熱心さの中で起こっているし起こる」**、「**神的な資格**

賦与と必然性の印象を身に帯びさせて起こっているし起こる」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の中で生命が死と、死が生命と取り換えられる時には、その都度、そのような意味での忠実さと熱心さが働いているのが普通である」。「そのような意味での忠実さと熱心さに基づいて、極めて多くのよき意志、ひどく真面目な敬虔さ、偉大なヴィジョン、……等々に変形された教会の維持における神の言葉」は、表面的には「わがまま勝手」にでなく、それ故に表面的には「神の言葉に服従しようとする誠実な意図を示しつつも」、内在的には「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書そのもの」を、「時代や状況」のただ中で、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とはしないのであるから、その『神の言葉』なるものは、ただ〔生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者」、その人間の意味世界・物語世界・神話世界としての〕神の言葉についての概念に過ぎないし、〔人間の自由な自己意識の類的機能により〕自由に形成されたものに過ぎない。したがって、それは、第二の形態の神の言葉である「聖書そのものの中で、実際に聞かれるようにと自分を与えている〔起源的な第一の形態の〕神の言葉ではない」。そのような第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とはしないところの「神の言葉についての〔生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された〕概念」は、「たとえそれらがよいものである時にも、……公認された教義と信仰告白、光に満ち、有益な神学体系、聖書的な真理についての大胆な、人を鼓舞する洞察であっても、それらはすべて〔起源的な第一の形態の〕神の言葉ではないのであって」、「それらすべては、教会を維持することはできない」。そのような「保守主義的あるいは急進主義的な神の言葉についての概念」は、「それらがいかにもそのようなことができそうに思わせ、その概念を主張しようとする限り、ただひどく教会を瞞着すると共に危険におとし入れることができるだけである」。したがって、その時には、「どのような大群衆をその中に擁し、どのように優れた個人をその中に擁していても教会は存在しない。またそれが、もっとも豊かな生命を示し、国家と社会において、どのように尊敬されようとも〔第三の形態の神の言葉である〕教会は存在しない」のである（『啓示・教会・神学』）。何故ならば、第三の形態の神の言葉である「教会に対してまことの死およびまことの生命に関して決定的なことを語る法廷」・原理・規準・審判者・支配者は、啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」――すなわち、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自

身と共にその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」として現存している聖書（イエス・キリストによって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性も賦与され装備された預言者および使徒たち「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての聖書）である。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である「**教会が維持されること**」は、その「**教会が、〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞**」において現存している〕**聖書の自由と支配を認識し許容し**」、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、「**聖書にのみ聞き、聖書を教会の宣教の規準・法廷・審判者として、自らを自己吟味し**」、自らの宣教を「**批判し、訂正し**」、「**全面的に除去してしまうことができる透明性を必要とするのである**」。このことは、第二の形態の神の言葉である「**聖書自身**」が、第三の形態の神の言葉である「**教会をして、繰り返し聖書に戻って行くよう教会を強いる**ということである」。しかし、キリストにあつての神だけでなく、われわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もという不信仰・無神性・真実の罪のただ中にある「われわれは、たとえ聖書に対する最大の忠実さをもってしても、聖書に対してこの自由を与えることはできないであろう」。したがって、「**ここでもわれわれは……〔神の側の真実としてある、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動としての、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞**」において現存している聖書——〕それが与えられていることに対して……ただ感謝することができるだけであり、それが与えられることに対して……繰り返し祈ることができるだけ……である」。

起源的な第一の形態の「**神の言葉の自由**」（具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書の自由）は、第三の形態の神の言葉である「**教会を支配する自由である**」。したがって、具体的には、第三の形態の神の言葉である「**教会に宣教を義務づけている**」第二の形態の神の言葉である「**啓示との＜間接的同一性＞**」において現存している「**聖書が教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならないのである**」。第三の形態の神の言葉である教会は、「**聖書の権威と自由を剥奪したり、相対化したしてはならないのである**」。教会は、「**聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である**」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞の下で、「**教会と啓示および聖書と等置したり、同一視してはならないのである**」。その「**神の言葉の自由による教会の基礎づけと維持**」は、「**教会が、神の啓示、神の名誉と人間の救いに仕えるために、〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて〕出来事として起こるのである**」。起源的な第一の形態の「**神の言葉を通して召され、言葉に対して信仰を捧げる者たちの集まりおよび一**

致としての教会」は——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指す教会は、キリストの「昇天と再臨の間の時間において」（聖霊の時代、中間時において）、第三の形態の神の言葉として、「神の啓示のしるし、同時にまた来りつつある神の国において神の子を通してあがなわれた新しい人間のしるし……である」——「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである」（『福音と律法』）。第三の形態の神の言葉である「教会」は、「このようなしるしとして……奉仕しなければならない」、「この世のただ中において、既に出来事として起こった（教会に属する者たちおよびすべての人間の）和解およびキリストの昇天と再臨の間の時間は、信じる人間における自律的な人間の国〔自律的な人間の時間・世〕ではないということを経験して、来るべき救済〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」〕を、またすべての者の主であり給う自分たちの主であるイエス・キリストを証しすることによって、指し示さなければならない」。ここで「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為に出来事）であるイエス・キリスト自身による「和解」は、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、主格的属格として理解されたローマ3・22、ガラテヤ2・16等のギリシャ語原典「イエス・キリスト<の>信仰」（「イエス・キリスト<が>信ずる信仰」）による「律法の成就」・「律法の完成」そのもの、すなわち「神の義、神の子の義、神自身の義」そのもの、それ故に成就され完了された個体的自己としての全人間・全世界・全人類の究極的包括的総体的永遠的な救済（この救済概念は、平和の概念と同一である）そのもののことである。

キリストの「昇天と再臨の間の時間」（聖霊の時代、中間時）は、「信じる人間におけ

る自律的な人間の国〔自律的な人間の時間・世、生来的な自然的な人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能の無限性の時間・世、生来的な自然的な人間の自己運動の時間・世〕であるという誤った考え方」は、「新プロテスタント主義〔近代主義的プロテスタント主義的キリスト教信仰・神学・教会の宣教〕を典型としている」。この「新プロテスタント主義において、和解は、遠い歴史的な記憶であり、救済は神学的進歩史観における斬新的な進歩の果てに想定される遠い目標である〔この典型が、ヘーゲルの歴史哲学との混合としてあるモルトマンの神学的三段階的進歩史観である〕」。したがって、「彼らのキリスト教信仰は、結局ただ人間的な能力、意志、働きの特別な形態に過ぎない」。その時には、まさにそのキリスト教「信仰」・「神学」・「教会の宣教」は、フォイエルバッハやハイデッガーが客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的に批判したように、「(中略) 神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」し、「(中略) 神の啓示の内容は、〔キリストにあっての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 (中略) こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない!』」し、「存在者レベルでの神への信仰」でしかないのである、「ただ〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された、その人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」でしかない〕宗教として理解されることができるだけである」。したがって、この「宗教としての信仰」共同性は、「信じる主人たちがひとりびとりの願望や主張をできる限り相互にいたわり合いながら、ある種の一致と共通の努力に向かって同盟を結んでいる目的社会、クラブであることができるだけである……。これら、「視覚的錯覚と聴覚的錯覚によって、主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである(Ⅱペテロ三・八)ということを理解しなくなった、わがまま勝手な、軽んじる、偽教師に対してぶつけられるべき法廷」(・審判者)は、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉である『聖なる預言者たちがあらかじめ語った言葉と、使徒たちが伝えた主なる救主の誠め』(Ⅱペテロ三・二)である」。

キリストの「昇天と再臨の間の時間」(聖霊の時代、中間時)に現存する「信じる人間」は、啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、終末論的境界の下でのその途上性において、絶えず繰り返す、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粹な教えとしてのキリストにあって

ての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（通俗的な意味でのそれではなく、キリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行く「責任をもっている、自律的ではない人間である」。ここで、「隣人愛」は、第三の形態の神の言葉である教会が、全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えのことである。「彼は、〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事を与えられた〕信じる人間としてキリストのからだに属する肢体である」。そのような仕方では「人間が神に聞く」というこの一事によって——神が人間に語り給うゆえに聞き、神が人間に語り給うことを聞くというこの一事によって、基礎づけられ、支えられた」「教会は、自分のかしらを天上に持っている」。したがって、そのような第三の形態の神の言葉である「教会」は、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書の自由と支配の下にあるから、教会の中に集められた人間の洞察と恣意にまかせられてはいないのである」。このような訳で、第三の形態の神の言葉である「教会は、徹頭徹尾人間から成り立っているものであるが、決して人間の王国ではない」、それ故に「教会に委託されたイエス・キリストを証するという課題」が、「それらの人間たちの自由裁量にまかせられているところの君主政治的な王国でないし、貴族政治的な王国でもないし、民主政治的な王国でもない」。「そうではなくて、……教会は、それが〔それ自身が出来事の自己運動を持っている〕神の言葉を通して創造され、維持されているように、また〔起源的な第一の形態の〕神の言葉を通して支配される」、具体的には、「イエス・キリストにあつての神の言葉の証しという形態での神の言葉〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している〕聖書を通して支配される」。このような訳で、「われわれが、イエス・キリストは教会を支配するという時、聖書が教会を支配すると言うのと同じことを言っているのである」。「その人間性〔自由〕の中で神の子が、われわれに啓示された神としてのこの神の子が、啓示し給う働きが〔子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事、起源的な第一の形態の神の言葉、「啓示ないし和解の实在」、イエス・キリストにおける「啓示の出来事」が〕、その支配についての〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」であり、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している〕預言者的——使徒的証言の中で、自分の預言的な務めを続けるように、み子の支配は、神ご自身の支配は、この証言の中で、この証言を通して、〔〈客観的な〉信仰告白および教義Credoとしての第三の形態

の神の言葉である] **教会の身に及ぶということである**」。客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「**聖霊も、また、……まさにこの証言の霊である**」、「この証言をまこととして証しする**霊**、この証言が心をかちとる**霊である**」。「聖霊は、聖書の中のキリスト教原理を、覆いをとって明らかにする」、「キリストについて語るができる能力（ヨハネ一四・二六）であり、上からのよき賜物である」。この神のその都度の自由な恵みの神的決断による「**聖霊の注ぎ**」により「**聖霊を持つ**ということは、キリストにおいて起こった和解にあずかることであり、キリストと共に、死から生命への方向転換におかれることである」。「この二つの方向転換において、イエス・キリストにあつての神の啓示の要素としての**霊の本質**は、キリストにある自由を意味している」。キリストの「昇天と再臨の間の時間」、「中間時」、「**聖霊の時代**」は、第二の形態の神の言葉である「**預言者的——使徒的証言**の中での〔起源的な第一の形態の〕神の言葉を通して規定された時間である」から、第三の形態の神の言葉である「**教会を支配する仕方**」について、客観的な「**存在的必然性**」としての客観的な「**イエス・キリストの支配を形式的に……承認しつつも**」、主観的な「**認識的必然性**」としての主観的な「**<直接的な>霊の導きの支配を承認することは、すべて偽りである**」。何故ならば、主観的なキリストの**霊である「聖霊の注ぎ」**による「**信仰の出来事**」は、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのそれであるからである、「**言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である**」からである。したがって、その時には、「**教会を掌握する場所として、誤ることのない教皇が指し示される……あるいは誤ることのない会議が、あるいは権威的な司教の役職が、あるいは実体化された牧師の務めが、あるいは何らかの自由な指導原理が、あるいは教会の中での靈感を受けた個人が、あるいは最後にそれとしての教会全体が指し示される……**」。また、第二の形態の神の言葉である「**聖書を無視して通り過ぎ**」、起源的な第一の形態の神の言葉である「**イエス・キリストの支配を、〔第三雄形態の神の言葉である全く人間的な〕教会が支配し管理する曖昧さにおける欺瞞的なもの**」は、「**天国におけるイエス・キリストの支配について、それからあのイエス・キリストの支配が突然地上に侵入してくる出来事について、語る……熱狂主義……であり、最後的には結局人間的な信仰**」における「**自律**」主義であり、「**それ故にそのものはイエス・キリストの教会について語っていないのである**」。

「**イエス・キリストの教会が存在している地平線**」は、第三の形態の神の言葉である「**教会が、教会支配の基本的な担い手としての〔第二の形態の神の言葉である〕聖書を、〔自らの思惟と語りと行動における〕原理・規準・法廷・審判者・支配者として考察の対象とする時、聖書は、〔第三の形態の神の言葉である〕教会の宣教の原理・規準・法廷・審判者・支配者として考察の対象となる**」。「**したがって、その時はじめて、教会は、〔「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続した第三の形態の神の言葉としての〕イエス・キリストの教会について語る**ことができる」。この

聖書を媒介・反復するという（聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とするという）「間接性〔間接的な関係性〕こそが、それは主ご自身を通して設けられ、主の甦えりを通して力を奮うのであるから、この関係のまことの直接性なのである」。したがって、一方で、第二の形態の神の言葉である「聖書が〔第三の形態の神の言葉である〕教会の支配を実行に移すところ、そこでは」、起源的な第一の形態の「神の言葉の自由を抑圧するところの自律主義」、第二の形態の神の言葉である「聖書を……除去する熱狂主義に対して、律法的に、禁止しようと欲することができる」。しかし、他方で、第二の形態の神の言葉である「聖書が〔第三の形態の神の言葉である〕教会の支配を実行に移すところ、そこでは」、「教皇と会議、司教と牧師、会議の主権と教会の主権、指導者と霊を受けた者たち、神学者の奉仕と教会の中にいるそのほかの者たちの奉仕、男たちの奉仕と女たちの奉仕が、その都度存在することが、あるいは存在しないことができる……」。第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書が、〔第三の形態の神の言葉である教会を〕支配し、聖書によって〔教会が〕支配されること」を、「教会が実際に真剣に受けとる時」には、「聖書は、教会とその主の間の関係の直接性〔聖書を媒介・反復するという「間接的な関係性」としての「まことの直接性」〕を破壊することはないし、また教会に対して律法を押しつけることもしない……」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会（すべての成員）は、その宣教において、キリストの「福音が純粹ニ教エラレ、聖礼典が正シク執行サレル」という「教会的な行為の……真中において」、啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——すなわち、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書の支配に対する感謝と、この支配が現実に続いておこなわれるようにと願う祈りが、聖書の注釈に先行しつつ永続的行われるべき決定的な行為である」。